

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月13日現在

機関番号：33910

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2912

課題番号：22720136

研究課題名（和文） 18世紀フランスにおける「エネルギー」と近代の成立

研究課題名（英文） The “Stylistic Energy” and the formation of Modern Europe in the 18<sup>th</sup> century.

研究代表者

玉田 敦子 (TAMADA ATSUKO)

中部大学・人文学部・准教授

研究者番号：00434580

研究成果の概要（和文）：17世紀まで、主に聖体論争で用いられ、「神」的な力とエネルギーされていた「エネルギー」という語は、18世紀になると「エネルギー」は「人間」が生み出す文体の力という意味で流行するようになる。この「エネルギー」概念の変化の背景には、18世紀における古代修辞学の復権があった。本研究においては18世紀の修辞学における「エネルギー」と「速度」の概念の重要性について、「研究成果欄」に示す3点を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Rhetorical treatises in seventeenth-century France follow the thought of Port Royal. As Marc Fumaroli said, in this age, a “rapid style” that belongs to the ancient stoic tradition—especially to Seneca—was to be avoided. It was called “style serré” or “style coupé,” and knew as it risked making the expression unintelligible. However, in the following century, the rules changed significantly. In contrast, a “rapid” style started to be admired. The rapidity was thought to be a result of the “concentration” of style, realized by expressing rich contents within short expressions. In other words, in the age of enlightenment, clarity was sacrificed for the sake of density and rapidity.

That “paradigm change” can be explained by the secularization of the system of representation. Some notions were considered as the elements that constitute the mystery of writing, such as “energy” or “sublime”, were separated gradually from their previous theological connotation. Whereas in the seventeenth century, the mysterious force of writing was regarded as a product of the God’s power, in the eighteenth century, the thought developed that humans also use this power. And there, the stylistic power is the result of a succession of concise expressions.

This transmutation in representation theory can be explained by the popularity of a rhetoric theory book entitled *On the Sublime*, translated by Boileau in 1674. After the publication of *On the Sublime*, the concept of “sublime” became one of the most important subjects of European intellectual society. While the sublime in the classical age belonged to the theological force, Longinus’s treatise invoked that humanities education is needed to arouse the “stylistic energy” in writing.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：18世紀、フランス、啓蒙、修辞学、文体論、熱狂、趣味判断、エネルギー

### 1. 研究開始当初の背景

18世紀における「啓蒙」思想の発展は、科学技術の発展と徐々に後退しつつも依然として強い影響力を発揮していたキリスト教権力の拮抗に立脚している。18世紀文体論における「エネルギー」の概念の流行と発展は、近代における科学技術の発展のみならず、「近代」の成立そのものと大きく関わっていると考えられる。

18世紀から19世紀前半におけるフランス文学の「エネルギー」については、先行研究として、ジャン・ファーブル『啓蒙とロマン主義』（1963年）、ミシェル・ドロン『啓蒙の転換期におけるエネルギー概念』（1986年）がある。しかしファーブル、ドロンの研究はそれぞれ「ノスタルジー」、「近代文学と＜私＞」というサブテーマに基づく、文学作品のみを対象とした、狭義の文学研究である。さらに、カルロ・ギンズブルグの研究は近代修辞学（レトリック学）への関心の高まりを示しており、特に『糸と痕跡』（2006年）は修辞学における「エネルギー」について論じている。

本研究に着手したきっかけは、2009年2月、MITのワークショップにおいて、近代の「エネルギー」の定義の変遷について行った、「A History of Energy in Modern Age」という題目の招待講演である。この報告について、『アリーナ』特集号論文（（中部大学国際人間学研究所）7号、2009年、pp. 358-365。）を執筆し、聖体論争における「エネルギー」概念について論じたことが、本研究の着想のもととなった。

### 2. 研究の目的

16、17世紀のヨーロッパにおいて、キリスト教の神が専有する「ことば（ロゴス）の力」であった「エネルギー」は、18世紀においては、人間の「言説（discours）の力」という意味で使用されるようになる。「神学用語」、「言説の力」というと、一見、現在の「エネルギー」観とは無縁のものであり、そこでの定義は古代ギリシアと19世紀にあった断絶のように思われるかもしれない。しかし、近代ヨーロッパにおける「エネルギー」の用法は、決して「脱線」ではない。本研究に着手する以前に発表した成果においては、聖体論争における「エネルギー」の概念の発展を分析することとどまった。しかし、18世紀の修辞学、文体論における「エネルギー」という語の普及と流行は、当時の科学技術の発展に裏付けられており、また美学の発展にも大きな貢献を果たした。本研究は、近代ヨーロッパにおける「エネルギー」論について分析することにより、「エネルギー」という語が、つねにその時代の人間にとって先端的課題を示唆する用語であったのではないかという仮説のもと、あらたに美学、また科学思想史へと領域を拡大し、深化させることを目的としている。

### 3. 研究の方法

本研究においては、美学、科学論を中心とした思想史の方法と、先行資料との異同や影響関係を精査する書誌学的方法を併用した。研究遂行中は、入手可能な刊行図書の購入、ILLサービスでの複写といった国内で可能な文献調査をおこなう一方、可能な限り、フランス国立図書館、ブリティッシュライブラリ

一などに赴き、一次資料の収集に努めた。また、海外出張中は、国内ではアクセスが難しい電子文献データベースを網羅的に検索し、研究文献の徹底的な渉猟をおこなった。その結果、本研究は、限られた資料のみを対象とした従来の研究とは異なり、対象資料に対する網羅的な調査を第一の特徴とする画期的な研究となった。

具体的には、本研究の資料収集・分析は以下の5つの行程によっておこなった。

- (1) 18世紀フランスの辞書・辞典類に関する分析
- (2) 18世紀の修辞学教科書に関する分析
- (3) 18世紀フランスの文学作品に対する分析
- (4) 近代科学論に関する調査・考察
- (5) 近代ヨーロッパにおける美学論の考察・分析

#### 4. 研究成果

本研究の成果については、研究期間内に発表した論文、著書にまとめたほか、現在、単著の書籍の刊行を準備中である。ここでは本研究課題において着目した18世紀の文体論における「エネルギー」、「速度」の概念の重要性について、以下の3つのテーマについて集約して示す。

##### ① キリストの「エネルギー」から文体論の「エネルギー」へ

近代ヨーロッパにおいては、神学の分野で用いられていた用語であった「エネルギー」の概念が世俗化し、「エネルギー」も人間の所有するものとなった。このことを如実に示すのは、ダランベールが執筆した『百科全書』の項目、「エネルギー」である。この項目では、「エネルギー」が「文法」という分野に分類され、「ことばの力」としての「エネルギー」のみが論じられている。また、同じ『百

科全書』の項目「パトス」は、「エネルギー」を参照項目として挙げるとともに、エネルギーをその同義語としている。このように、「エネルギー」は、近代フランスにおけるフランス語修辞学理論の発展を支えに、人間が生み出すべき「文体の力」として発展した。

##### ② 近代科学論と文体のエネルギー

「エネルギー」という語がヨーロッパにおいて、現在のように物理学の分野で用いられるようになったのは、比較的最近のことである。19世紀初頭に到るまで、物理学的な「力」に関する議論において、「エネルギー」という語は用いられなかった。しかし、運動の定式化については、17世紀にデカルトが  $mv$  (質量×速度) と述べたのに対して、ライプニッツが活力 (*vis viva*) を  $mv^2$  (質量×速度の2乗) と定義したことから「活力論争」と呼ばれる論争が起こり、ダランベールが『力学』において両者の差異を示したことから沈静化したことが知られている。本研究においては、物理学における「力」の概念の発展が、文体の「力」としてのエネルギー概念の流行にどのように貢献したかを考察した。

##### ③ 熱狂・趣味判断・速度

「趣味判断」は、古代ギリシア、ローマで生まれた概念であるが、18世紀において流行した「趣味」概念には17世紀以前には見られない近代性がある。啓蒙の世紀に現れた新しい「趣味」概念は、当時刷新されたフランス語修辞学とともに発展したが、そこではロンギノスとボワローによる「崇高論」が3つの重要な役割を果たしていた。まず、趣味判断が天性の能力ではなく、訓練によって習得される技術とされるようになったことが挙げられる。さらにボワローが『崇高論序文』においてコルネイユの作品を崇高の例として用いたことを端緒に、啓蒙期の修辞学においてはフランス古典主義時代の文学作品が

古代ギリシア、ローマの作品に比肩する「新しい古典」となり、趣味判断の基準とされていく。そしてロンギノスとボワローの「崇高論」が果たしたもっとも重要な役割は、趣味判断に関する議論を17世紀古典主義文学理論が重んじた「規則」への信奉から解き放ち、趣味を理性による冷静な判断ではなく、「熱狂」をとともなう判断とするための論拠となったことである。ロンギノスとボワローが論じた「崇高」は、最終的には言語化できない、あるいは言語化することによって効力を失うという特徴をもつ趣味判断に固有の超越的な力を説明するために不可欠なものであった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 玉田敦子、「啓蒙」と「熱狂」 — フランスにおける「趣味判断」の由来と近代性」、中部大学人文学部研究論集(中部大学人文学部)、第29号、2013年、pp. 145-165、査読無。
- ② 玉田敦子、桑島秀樹、坂本貴志、「崇高と近代の成立」、*cahier* (日本フランス語フランス文学会)、7号、2011年、pp. 21-26、査読無。
- ③ 玉田敦子、「18世紀における『オシアン』と崇高・文化的ナショナリズムの問題を中心に」、ケルティック・フォーラム(日本ケルト学会)、13号、2010年、pp. 25-35、査読有。

[学会発表] (計9件)

- ① 玉田敦子、【報告】「新旧論争と“完成”の概念」、「公共知」研究会、名古屋大学、2012年12月22日
- ② 玉田敦子、【招待講演】「18世紀フラン

ス修辞学における「近代」、『デカルトにおける説得と論証およびその人文主義的起源に関する研究』第4回研究会、追手門大学、2011年9月13日

- ③ Atsuko Tamada, “Speed” of style or a paradox of enlightenment : A comparative study of French and English rhetoric theory in the eighteenth century (Graz version), « Session 115 : Public knowledge in the east and the West : Comparative perspective organized by Shinichi Nagao (Nagoya University) and Hi Kyung Moon (Korea University), XIII<sup>ème</sup> Congrès International des Lumières, Graz (Austria), 2011.7.28.
- ④ 玉田敦子、【共同研究の主宰と報告】「これからの人文学に求められるもの」、中部大学中部高等学術研究所共同研究「新未来研究会」第2回近代史部会、中部大学、2011年6月17日
- ⑤ 玉田敦子、【共同研究の主宰と報告】「教養教育・エネルギー・ジェンダー」中部大学中部高等学術研究所共同研究「新未来研究会」第1回近代史部会、中部大学、2011年5月6日
- ⑥ Atsuko Tamada, “Speed” of style or a paradox of enlightenment : A comparative study of French and English rhetoric theory in the eighteenth century (Nagoya version)、国際ワークショップ「18世紀における公共知の形成」、名古屋大学、2011年2月11日
- ⑦ 玉田敦子、【ワークショップにおけるパネルの企画と研究報告】「崇高と近代の成立」、日本フランス語フランス文学会秋季大会、南山大学、2010年10月18日
- ⑧ 玉田敦子、【報告】「18世紀フランスに

おける趣味と「新しい古典」（日本 18  
世紀学会、新潟大学、2010 年 6 月 27 日）

〔図書〕（計 1 件）

- ① 桃井治郎、玉田敦子編、『近代と未来のは  
ざままで』、2013 年、風媒社、235 ページ。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

玉田 敦子 (TAMADA ATSUKO)

中部大学・人文学部・准教授

研究者番号：00434580